

14. 5-145



1200501214762

14.5

145

啓明會紀要
第二十二号

現今に於ける

米國の教育

樺山愛輔著



始



14.5
145

要第二十二號

伯爵 樺山愛輔述

現今に於ける米國の教育

法財人團 啓 明 會

目次

序.....

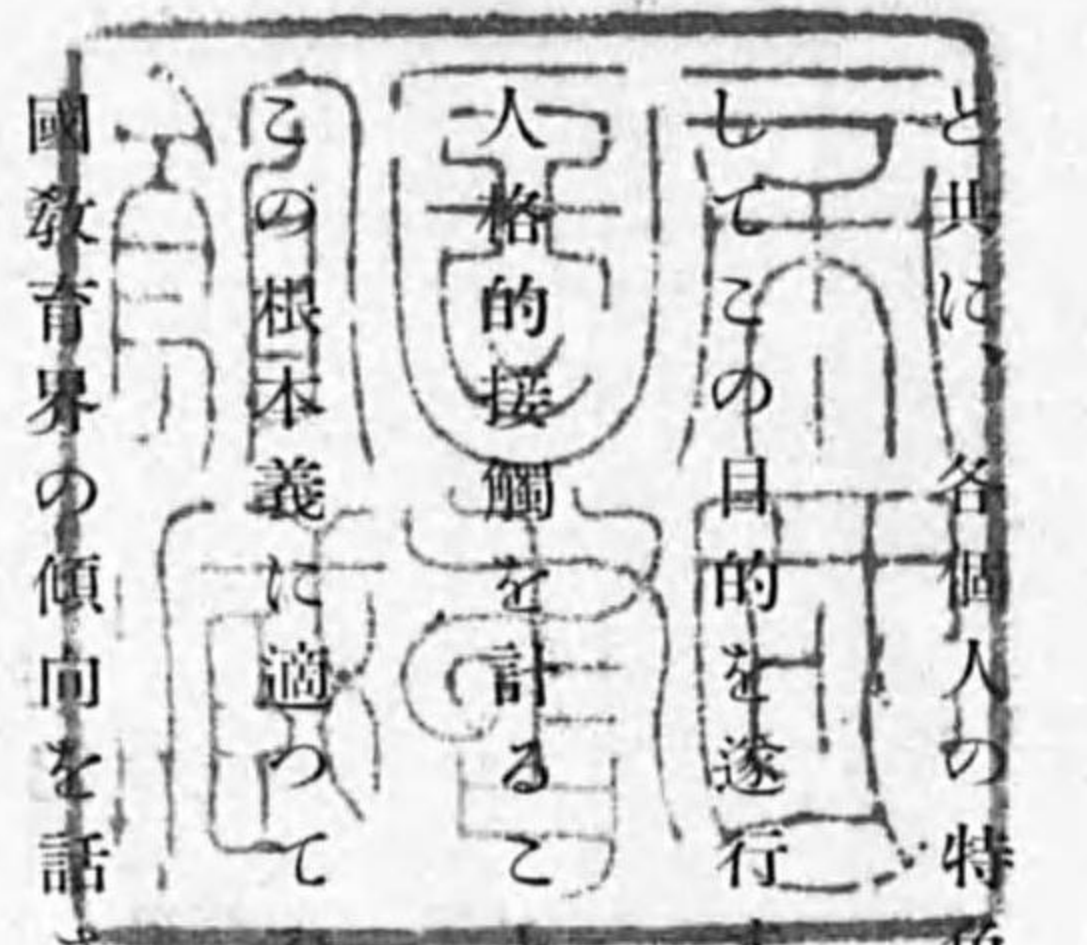
『現今に於ける米國の教育』.....

附録 本會寄附行爲、職員名簿、出版目錄.....

發行所寄贈

序

教育の第一義は、人間をして萬物の靈長たる所以の根本性根元力を伸張せしむる



に教育の第一義に邁進せんとする力強き運動を開始せることを知つた。洵に興味ある現象と謂ふべく、大に参考とすべき事柄であると信ずる。これ又最近に於ける我



國の教育革新運動とも自ら相通ずるものであり、東洋本來の教育にも合致するものゝやうに思はれる。依て伯爵にその口述を請ひし所、多忙中にも拘らず幸に快諾せられ、これを筆記したものが即ち本書である。茲に本紀要として發表し、廣く諸賢の閲讀を希望する次第である。

昭和十一年十二月二十日

財團法人啓明會常務理事 鶴見左吉雄

現今に於ける米國の教育

伯爵 樺山 愛輔

或る時啓明會理事の集會の席上で、私は現今の米國の教育事業に就いて雑談を試みましたが、皆様からそれは興味の深い話であるから是非速記にとる様にとのお勧めが御座いました。私が私と致しましては話の内容が餘り薄弱と存じまして其の儘に打捨てて置きましたが、其後も再三御催促を蒙りましたので、茲に意を決し、不備を省みず、自己の見聞を中心に御話を申述べる次第で御座います。

私は先づ話の本筋に立ち入ります前に、米國々民が教育機關に對して如何なる觀念を持つてゐるかを簡單に御話し申上げるのが順序であると考へます。一體米國は五十何ヶ國からの移住民によつて形成された國柄で御座いまして、その一億何千萬といふ人口は、我々古き歴史と傳統とを有つ日本人の眼より觀れば、誠に之れ烏合の衆なりと申しても過言でない程であるのに、而も近々百年たらずの間に、此の大

衆が全く統一された國民となり得た事實こそは、世界未曾有の事と云ふ可きでありませう。然らば此の統一を成就する爲めに米國は何處に其の原動力を見出したかと申せば、結局教育事業其の者の中に此の力を求めたのであつたと、私は信ずるのであります。御承知の様に、米國の憲法に主權は人民にありと規定してあります。此の様な自治體の社會に而も中心力となる可き歴史や傳統も無い場合、兎もすれば分散孤立に陥り易い全國民を打つて一丸とする様な緊密な統一を完成する爲めには、何か全大衆を統率し得る如き精神を新たに創り出して行かねばならぬのは當然の歸結であつて、この精神的原動力を育成する場所として教育機關が重要視され、特に宗教、具體的には寺院を背景とした教育機關によつて、之が遂行を期待したのであります。従つて米國民の教育事業に關する態度は、世界に其の比を見ざる程眞剣であります。従つて他國民のもつ歴史や傳統に代はる可き強力なる精神的統一力を、此處よりして生み出さうとする努力が教育機關への尊重、教育事業への深甚なる關心となつて現はれて來て居るのであります。例へば今年ハーバード大學ではその創立三百年を記念する大祝賀會を催しましたが、この爲め世界各国よりは十餘萬人の人が

招待され、東京駐在の米國大使の如き之に出席の爲めわざわざ歸國されたといふ一事を以てしても如何に母校を愛する念の深いかを察せられるのであります。又米國の大學の殆んど全部が政府の補助等によらず、皆その緣故者の寄附によつて創立維持されてゐる事實も、教育事業に對する國民一般の關心の深さを示して居ります。之れ偏へに、國に帝室も無く、又傳統も無き國民が、その精神的中心を確立するもの、教育機關の運用以外に無しとする結果であります。

此の様な國民の態度から、従つて又絶えず教育の方針に對する眞面目な批判が行はれ、國家情勢に應じた反省が加へられ、國家の理想を實現する爲めの方法の攻究等が、自由に且つ活潑に行はれて居ります。歐洲大戰後世界を壓倒した米國の經濟界の繁榮が、一九二九年の株式界崩落に會つて急轉直下し、米國の經濟と政治界は混亂して殆ど拾收の見込も立たず、甚しい不幸な状態に陥つた現在、この不幸を齎した原因が何處にあつたかを研究した結果、教育界の大家たちは之ぞ從來の教育方針の缺陷に因するものであることに氣附いで、教育の一大改革によつて、此の情勢を救済するより他に途無しとの結論に達したのであります。この様な反省が今や國

を擧げて行はれ、自己に對する嚴格な批判を徹底して、茲に從來とは全く方向を異にする教育方針を案出し、而も之を革新的な實行力に移して、國民の精神的方向を急角度に轉回しようとしてゐるのが米國教育界の現状なのであります。

私が始めて米國の教育なるものに就いて、私の豫想外の事に氣附いたのは、今から五年程前恰度滿洲事件の際渡米した時のこと、旅の汽車の中で「あめりかん」といふ雜誌に、大統領候補者にもなつたオーエン・ヤング氏の書いた米國の教育方針の缺陷を指摘した論説を読んだ時でありました。この人は有名な事業家であり、又經濟學者としては、かの獨逸賠償金方法を立案した米國の第一人者でありましたが、扱てその論文の主眼とする所は現在の米國の教育制度に於いては、人間の持つて生れた最も主なる「智能」が没却されてゐること、然るにこれこそ事物を直覺的に理解する智力、即ち Intuition であり、之を教育に於いては第一位に置く可きであり、第二は應用力 Power of Application であり、然る後所謂科學的知識に着目するのが正しい順序でなければならぬ。此の順序を顛倒したものが正に從來の教育方針であつて、世の中は指導精神を失ひ、今日の不幸なる情勢を來した根本の缺陷であると指摘し

てゐたのであります。私は之を読み、徹底した科學知識萬能である可き筈の米國人から、直觀知に就いての注意を喚起し、「生得知」を尊重して、之を以て國民教育の根本を形成す可しとの論を聞き得たことを誠に意外に感じたのであります。又確かその翌々年であつたと記憶いたしますが、米國から經濟團を迎へたことが御座います。團長は前駐日大使フォーブス氏で、その副團長であつたカロールといふ人と、私は食事の席で懇談の際、談偶々米國の教育制度に及んだ時、此のカロール氏の言はれるには、自分はエール大學卒業生であり、又絶えず同大學の經營に注意して居るものであるが、我が母校エールは目下教育方針の改革最中であつて、それはハーバード大學に續いて實に革新的刷新を實行してゐる。自分の考へる所では元來教育の根本は「書く」、「讀む」、「數へる」ことで其の餘は常識と判斷力であるに過ぎない。而るに此の原則を忘れ、履き違へたものが我が米國の教育方針である、と論じて居りました。之も亦日本人の私には、非常に興味深く聞かれた話でありまして、カロール氏の言はそのまゝに我が天保時代の日本人の言となるので御座います。この二つの挿話によつて觀ましても、最近米國の精神界の變化が如何に急激なものであるか

が想像されるかと思ひます。

偶々読み、偶々聞いた此の事實が、昨年来國を旅行中私には生きた體驗となつたわけであります。と申しますのは昨今私の最も關心を有つて居ります國際文化振興會の事業を披露の目的を以て昨年渡米いたしました私は、彼の地の文化事業の中心が殆ど全部大學に集中して居ります事情に鑑みまして、滞在二ヶ月餘の間に東西をかけて十數ヶ所の大學を訪れたのであります。此の際米國の教育制度に就きましては一通り自ら期せずして見聞することを得たので御座いました。私の話は實は此の見聞せる結果を茲にお話しするわけであります。

結論より申述べれば、現在の米國教育家は從來の米國の科學的、物質的教育の尊重が、人間性の本來の面目たる頭寒足熱の原則の軌道を踏み外したものであることに氣付き、物質的知識萬能の爲め所謂生得知と所謂後得知との本來の地位を顛倒し來つた形式の弊を悟つて、今やその主客の位置を正當な舊位置に還元す可き方法を研究し盡して居るのが現在の状態であると、了解して宜いと思はれます。そして此の様な反省から生れ出た教育の根本的建て前はと申せば、知識を授けるには「感化

の網」とでもいふ可きものを通した知識でなければならぬ、さもなければ人格を養成し世の指導者を得ると云ふことは不可能である、といふにあつて、此の考へ方こそ、その種々な點に於いて、我が國の昔日の寺小屋式教育に類似して居り、私は茲に尠なからぬ興味を感じたのであります。物質的、科學的知識の高度に進んだ米國が、而も尙ほその經濟界、政治界、否社會全體、國民生活の上に今日不幸や不安定を孕むことは、畢竟その知識を貫いて國民を統一し指導する精神を排除してゐるが故であることを痛感した知識者たちが、今に至つて知識に對する態度を急角度に轉廻し様と試みてゐるのが現下の米國なのであります。

斯くの如き考へが如何に實行に移されて居るかを、實例に就いて申述べませう。ボストン市に於いて最も古い歴史と高い見識をもつタバアン俱樂部といふ社交團體が御座います。會長はペリー博士といつて唯今評判な中等學校教育家の一人であります。私は此の俱樂部に案内を受け、會長と同席した際、親しく同博士の中等教育に就いての意見を承つたのであります。博士の考へる所では、從來の如く唯知識を注入する遣り方と異つて、新しく企てる教育の方針は教員其の人の生徒への感化

力を充分發揮せしめねばならぬ、それには今迄の如き教員對生徒といふ觀念が變はるやうに仕向けねばならない、即ち先生は自分達の社會的先輩にして自分達の良き相談相手であるとの氣分を生徒たちが持つ様に仕向ける可きである。此の目的を達するには先づ第一に一クラスの人數を極力減少することであつて、ペリー博士自身の經營するフイリツプス・エキセター校に於いては十人を一級とし、教室も食卓の如きテーブルを取り圍んで、極めて自由な氣持に坐しながら宛も懇該會の如き情味をもつて、自由自在の質問應答を進め、一時間の課程を了へて行く。其の間教員が生徒に教へるといふ指揮注入の感は薄らいで、却つて先生は此の座談會の座長格となり、談話の種を播き、生徒は自發的に各自の素質修養に應じて、自分の發育を自然に工夫して行くのであり、取りも直さず獨學の方針である、と博士は説かれました。誠に之れ一切の強制を去つて、自發を尊び、自らの工夫によつて自己の機根を開拓して行く仕組みであります。

次にもう一つ私の體驗した他の中學校のことをお話し度いと思ひます。此の學校はボストンの近傍、デア・フョールドといふ村に御座いまして、昨今米國では非常

に有名であり、最も時勢に適する經營方針によると見られて居ります。校長はポイデン博士で、氏も私の母校アーマスツト大學の卒業生にして、一生を捧ぐる社會奉仕として中等教育に志し、其の青年養成に關する一家の理想を以て今から卅有餘年前此の學校に手を着け今日に至つて居るのであります。誠に尊敬す可き稀に見るの教育家であります。私は此のポイデン博士の招待を受け、その學校の檢分に参りましたが、先づ始めに寄宿舎から案内されたので御座います。學生の部屋の一號より七號まで順を追ふて見せられた後、校長は私に感想を求めたので、私は拜見した各部屋の感じが一々異ると答へた處、博士は如何にもその意を得たらしく然りと答へ、更らに説明して曰く、自分の研究によれば寄宿舎の各部屋の面積は九呎平方即ち四疊半が物を謂ふに適當の大きさと考へるのであつて、此の他に三尺餘方の押入れ一つ、又學校から給與する家具は、寢臺と木製椅子二脚、小形卓子一箇、他は全部學生各自の持参するところで、これは勝手に配置され、各室の裝飾は各々極端に異つてゐて、茲に學生各自の個性は充分に發揮して來るのである。此の様に何事にも自由な個性を發展させ様とする面白い一例を挙げると、此の寄宿舎にゐる學生の一人

に釘に興味を有つて絶へず蒐集してゐるものがある、彼は何百年以來のありとあらゆる釘を丹念に集めるが、その發見には到底尋常の知識ではなく第六感とも云ふ可き感知によつて探り當てて行く。各自の個性を發揮して行く結果は、又その個性に應じた各自の異なる趣味が開發され獨特な智慧が磨かれて行くのである。教育家は正に此の點に注目して、教育の努力を此處に集中す可きであるとホイデン博士は説かれましたが、此の言に依つて博士の教育觀は大體察知さるかと思ふのであります。即ち各學生の個性の相異をそのまゝに、個性を生かしきる様に育て上げるのがその理想と見られました。此の學校には四百餘名の生徒が居りますが、學校の總ての經營は生徒の手に委ねられ、學生の手によらざるものは僅かに炊事場の仕事と不淨の仕事のみであります。校庭、校舎、寄宿舎の手入れ、食堂の給仕に至る迄すべて生徒によつてなされます。校長は宛然父親の様に親しまれ、校長の宅は事實上生徒たちの家庭であつて、誠に美しい生活振りであります。附け加へてお話しして置き度いと思ふのは、私が此の學校で夕食後講演をした時の有様でありまして、自分としては多少の形式を整へた講演をなす積りで、校長に伴はれて會場に臨んだ所、其處

には自分の豫期に反して、廣いホールに腰掛一つ無く數百の生徒は胡坐姿で坐つて居たのには一驚を喫しました。これでは到底様式張つた話の出来る筈はなく、遂に講演は所謂座談會に落ち着いて了ひましたが、扱て其の結果は却つて私の話の趣旨が徹底し、豫期以上に話の目的が達せられたやうで、私は非常な満足感を以てその講演を終つたのであります。

以上申述べた斷片のお話は、或ひは人によつては如何にも無趣味に觀られかもしれませんが、私は異常な興味を覺えたのであります。寄宿舎を見て廻つた時の第一の話は、如何にも自發自動の精神修養の根元に注目して、口で言ふのではなく教へるのでもない、唯各自の個性的趣味に基づく行ひが立派に物を言つて居る事實であります。第二の話では、學苑の掃き掃除やら食堂の給仕、家屋内の整頓等は五體の勞力を意味して、一方には天然に接し又他方には日々の家庭勞働に従事することであり、肉體所謂物質による修養であつて、それは宛も我が國の寺院に於ける小僧の養成にも類似して居ります。又第三話の座談的講演會に見らるゝ一切の形式の除外は注意に價する。講演者と聽取者たる生徒たちとの心持ちの融和を圖つて、講演は飽く迄形

式を脱し、何よりも端的に内容の充實を目指して行く。此の場合に於いて私が受けた感想は自分の説明では中々傳へることが難しいけれど、兎に角青年の修養を、語らず、言はず、教へずして、日々の實行によつて的確にその目的を達して居る事は實に敬服の至りである。教員と生徒との間の親誼の關係は、師弟といふよりは寧ろ兄弟、親戚の間柄の如きものがあり、度々案内された校長の官舎の如き、全く生徒の俱樂部の感であつて實に和氣霽々たるものがあり、「徳」と「情」による青年指導の精神が一目瞭然であります。

中等教育に關する話は一先づ此の邊で止めようと思ひますが、その前に今一つ附言的乍ら、米國東部に於いて最も著名な中學校の一つであるローレンスヴィル校で行はれてゐる同種の改革に就いて述べて置き度いと思ひます。この中學校は後に述べるハークネスと云ふ大資本家が教育法刷新の試みの爲め補助金を出してゐる四校の一つでありますが、氏の右の目的の爲めの補助金額は飽くまでも秘密にされて居ります。察する所、氏は四校に於ける新教育組織への變更完了迄は秘密出資を繼續する積りに相違ありません。

右のローレンスヴィル校に於ては全校生徒五百名を、人員十名宛の各組即ち全部で五十組に分け、それ等の教育の爲め會議室なるものを五十室建築中であります。これは以前は教授室と呼ばれてゐたものであります。今日ではかゝる言葉は廢語同様となり、右の如く Conference Room 即ち會議室或は相談室と呼んでゐるもので、その各室の大きさは略二十疊敷程であります。室内の構造は、生徒の氣持を落付かせる様に採光の工合、壁の色、椅子、机の構造に至る迄、凡百の工夫が凝らされてあります。それ等の目的とする所は結局、生徒の獨學創造の思想養成の爲めにその精神統一を容易ならしむる點にあります。又この會議室の主人には教師が成り、教師はこの室を同時に彼の書齋とも爲して居ります。如斯同校の新教育組織の設備は注意周到、誠に至らざる無しを観がであります。が強ひて批判すれば、それは餘りに萬事行き届き過ぎてゐる爲め、反つて「過ぎたるは及ばざるなり」の懸念がありはしないかと云ふ事です。私見を以てすれば、右に述べた種々の中等教育刷新方法は、言はば、昔の日本の禪宗の寺が自然を利用して得たる結果を、飽く迄人工を以て達せんとするもので、私は如斯方法により所謂「門前の小僧、習はぬ經を讀む」とい

ふが如き所期の効果を收め得るや否や多少疑問無きを得ません。因みに、教育刷新の爲め右ハークネス氏が財政的援助をなしてゐる四校とは、ハーヴァード、エールの兩大學及びエキセター、ローレンスヴィルの二中學を指します。

大體に於て以上の如き諸方法により中等學校の教育制度改變が實現されつゝあります。

これより大學方面のお話を少々申上げ度いと存じますが、之とても至極概略的なものであることをお断りして置きます。

米國では大學にもその種類は多々ありますが、教育界を謂はゞ全般に於いて代表する教育機關としては、現在に於いては矢張りハーバード大學が其の第一位を占めて居りまして、現在の米國教育制度の改革刷新の根元、淵源も亦實に此處に在りて見る可きでありませう。一體米國には我が國の如き文部省といふ機關は御座いませぬ。中央政府には唯教育事業監督省なるものがあるわけでありまして、教育の方針といふことになりますと、宛も有力政治家が大統領に選舉されて國家の政治の指導統制を行ふと同様、最も勢力ある大學が自ら其の責任に當るので、現在では大體ハ

ーバード大學なるものが大方針を發表して、他の二三有力な大學の賛成を得れば、茲に天下の教育に關する輿論はそれに依つて動き、又其處に自然教育事業の統制力、原動力も存在して來るのであります。扱て斯うして生じた現今の革新しつゝある大學教育の大變化を概觀して一言にして盡すならば、それは大學制度が著しく社會化した事であると思ふのであります。以前は學校自體が一つの獨立した世界を形作つて居り、一般社會を超越した世の中であるかの如く觀念されてゐたのであります。今日では既に大學は社會の一層を形作り、學生は實社會の一員と見做さるゝに至つた觀が御座います。従つて學課の如きも昔日とは大いに異つて大きな變化を來し、政治、外交、經濟其他實社會の問題に關するものが多いのであります。從來の専門を辿つて行く謂はゞ縦斷主義から、廣く實際的知識を擴げようとする横斷組織への大變化であります。茲に於いて併し俗世界の空氣に觸れ乍ら、而も如何にして獨立自尊の思想を保ち鍛鍊せんとするかゝ問題となるのは見易いことでありまして、この爲めには健全なる個性を極力發達せしむるより他に方法に無いといふ事に歸着し、現存教育家の考へは全く此の點に集中して居ります。そして此の目的達

成の爲めに具體的には如何なる遣り方が選ばれて居るかと申せば、一學級を成る可く縮少することによつて師弟の關係を密接ならしめ、其の教授法も亦一變して講堂に於ける講壇からする所謂教鞭を執るの感は今や消え失せて、一級十數人が宛も食卓に友人相集つて懇談するかの如き狀況が今日の有様であります。

一體英國の大學ケンブリッジ、オックスフォードは二十計りの異つた宗教宗派によつて創立經營され、數百年を経て來た小さな大學の集合體であつて、中には學生總數僅に百名内外の所もあります。然るに米國の如き殊にハーバード大學の如きは今年に創立三百年の祝賀を催しましたが、此の間に堰堤無き河川の如く生徒の數は汎濫して現在では萬を以て數へるに至りました。教育革新の氣運は此の點より先づ改革に着手されたのであります。エール大學を卒業した前に述べたハークネスといふ大資本家が御座いまして、此の人が先づハーバード大學から米國教育界の改革を思ひ立ち、ハーバードを小大學に分割し、之を基礎として學生と教授間の親密な關係を誘致して、感化即ち個性教育の方針を立案いたし、現にハーバードでは之を實行しつゝあるのであります。これに據れば一大學校の單位を「ハウス」と稱し、學

生數の單位を三百に限り、これに學長を置きますがそれは監督者であつて、ハウスは寮であり、大きな家庭であり、同時に又俱樂部でもあります。現在ではこれが七棟出來上つて二年生より四年生の住居となつて居ります。新入生のみ所謂在來の寄宿舎に收容せられ、大學入學後一ケ年間は訓育の指導的な教育法によりますが、殘餘の三年間は俱樂部生活の如き至極愉快な境遇にあつて、師弟團欒の間に學生は獨學的教育的の下に凡て自發的に知識の發育を圖るのであります。ハーバード大學の學生間の通り言葉に、先生に學術上の事を問へば「先生は煙草をふかしてとぼける」といふのがありますが、之は取りも直さず生徒に對して萬事自分で考へて調べをつけよと謂ふ、即ち飽くまで獨學自發の思想を鍛鍊する一の方便と見る可きであります。此のハウスの組織こそ日夕師弟相集る俱樂部生活の間に會談し、食事を共にし、誠に情味濃き空氣の中にあつて、感化による人格養成の目的を達成しようとする意圖に外ならないのであります。此の精神は我が國の昔の禪寺などに於ける師弟の生活振りに類するもの多いことが感ぜられるのであります。

このハウスは夫々米國の生んだ有名な學者、政治家等の名前を附し、例へばアダ

ムス・ハウス、或ひはエリオット・ハウスの如き、いづれもその居住する學生をして朝暮先人への尊敬を喚起する如き名前であり、此處に學生と同居する教授は専ら學生の人格養成を本意とする専門家と見る可きで、専ら知識の注入を本意とする如き教授は又別に其の擔當者があるのであります。要するに人格の個性的養成之れ教育の本領なりとするのが其の方針であつて、科學的教育の極端に發達した結果たる社會が徒らに物質的知識に充塞されて、人格的要素の甚しい缺乏が暴露された實情より反省と批判とが加へられ、革新打開への途が開かれ始めたのであります。此のハーバード大學に於ける新式の教育、即ち教授學生の共同生活といふ方針は、一般的に米國教育界の教育方針を示すものと見て宜いでありませう。繰り返して申せば改革の方針は、一學級に於ける學生數を減少させること、指導注入法より轉じて獨學自習法に改めること、講義法よりはゼミナール、座談式となすこと、教授學生間の關係を宛も兄弟、親友關係とすること、學校を趣味の生活とし、學問することを義務強制する如き遣り口を變じて全く趣味の仕事となし、飽く迄獨學創造の思想を養成することに依て個性の陶冶を主目的とするものと見らるゝのであります。

以上述べました所は、主として室内方面、殊にその設備の點から觀た新教育傾向であります。次ぎに外部方面から觀た右の新傾向殊に學園(campus)學林(camp)及びスポーツに就き少しお話しする必要があると思ひます。

話の都合上少々私の曾て経験した一挿話を述べさせて戴き度い。それは今から十數年前、東京震災以前と記憶しますが、私はニューヨーク滞在中或る日「プリンストン」大學を訪問し、時の總長「ヒツベン」博士と懇談した事がありました。同總長は當時の米國教育界中最も重きを爲した權威でしたが其の時の談話中、偶々私は當時宿泊してゐたニューヨークの或る著名なホテルに於ける私自身の體驗に就いて語りましたが、その要旨は大略次の如くでありました。即ち、自分の今泊つてゐるホテルでは、殆んど理想的と言つて好い程旅客に對する凡ゆる設備が整つて居り、従つて自分は自分の室外に一步も踏み出さずして、公私萬端の用務は勿論、如何なる需要も満足せしめ得ぬものとしてない程で、その至れり盡せりの施設は實に勿體ない程である。然るに二週間程滞在して居る中に、つくづくホテル生活といふものに無味乾燥さを感じ出した。始は、それは何故であるか、解らなかつたが、今漸く判

明し出した。即ちその起因は、要するに身心共に自然の世界を離れてホテルと云ふ人工の世界に起居し、爲めに樹木や地面に直接に接する機会を失つたからである、と云ふ事に気が付いた。如何に理想的とは云へ人工のものは自然的のものに及ばぬ點が多い事は否めない。そこで博士にお尋ねし度い事があるが、それは自分の東洋人としての見地から、米國の最近の物質的發展特に工業界の躍進を観察する時、それは丁度制御の出来ぬ暴ばれ馬の觀があつて、この暴ばれ馬たる工業が現時米國の勞働、失業の諸問題、社會の道德、秩序等の混亂を惹起せる最大原因を成すと思はれる。若し然かりとすれば、この物質專横の世界に對し、それに反動を惹起し得る程の精神教育の準備が果して米國に有りや否やと云ふ事である。私の右の言に對して與へられた博士の次の答は誠に印象深いものでした。即ち「御意見の通りです。その精神教育の準備をするのが吾々教育家の責務です。若し米國がかゝる準備を持ち得ぬとすれば、吾々の文化は崩壊します」と言はれました。此の時より十年足らずして、一九二九年に、果してヒツベン博士の右の言に對する解答の如く、米國の物資萬能の世界に破滅の鐘聲が響きました。米國の精神教育は不備であつた譯であ

ります。

私がこの挿話を敢て引用しましたのは、あの當時とは異り、現今の米國教育界が教育方法としての天然或は自然の世界の利用に對し、如何に深い關心を持つてゐるか、換言すれば、學園或は學林に就き如何に大なる注意が拂はれつゝあるかを申し述べ度いと思つたからであります。

御承知の如く、米國では學園を *campus* と言ひますが、從來ではこの *campus* は言はゞ普通に言ふ校庭、或は單なる芝生を意味して居ました。併し、今日の其れは別の意義を附加するに至つて居ります。即ちそれは、ギリシヤ時代、或は東洋の佛閣等、に於ける學林の如きものを意味し、全然學校生活其ものゝ一部分となり、從つて今日では何々の *campus* と云ふ語はそのまゝ其の學校又は學校生活の代名詞として用ひられてゐる次第であります。是は、室内設備と相待つて *campus* を新教育組織の一部とし、出來得る限り生徒に自然に直接に接する機会を與へて教育せんとするものでありまして、宛も東洋の佛閣、佛寺等に於いて天然・自然との交友により自己の精神を陶冶する方法に類似したものと見るべきで、誠に面白い現象と思ひます。

次にスポーツに就きお話ししますが、右に述べました如く、各 campus に就いての觀念が從來と異り教育組織の一部と成つて來ましたのと同様に、今日はスポーツに對する觀念が從來のものとは異なるに至りました。中等學校は勿論の事、大學に於きましても一般に、學生は何等かの種類のスポーツを自己の學課として撰ばねばなりません。即ち從來はスポーツは一種の遊び事や慰み事 (pastime) に過ぎなかつたが、今日は學校の課程 (curriculum) の一部となり campus 同様に學校生活其のものとなつて居ります。スポーツに對する觀念が斯く變化して來るに従ひ、その目的も亦新意義を有するに至りました。昨今日本では四年後の所謂東京オリンピックの事が各方面で話題となつて居りますが、このオリンピック競技會も、起因を訪ねれば、昔時ギリシヤに於て諸國が割據してゐた當時、是等ギリシヤ諸國間の國際的融和を圖る爲め、共同の神ゼウスの祭典として催したものが源泉となつてゐる次第でありまして、結局オリムピックの眞意義はこの國際的融和の達成にあると思ひます。右の米國の學校スポーツの目的も此の方面に向つて動いて居ります。即ち現時米國の教育者達は、スポーツを以て國民を團結せしむる一方法となして獎勵して居ると云つて

も過言ではありません。其の最も顯著な例は、フットボール (米式蹴球) であります。現在ではこの蹴球試合といふものが、一種の國家的行事となり、全米に亘つて、母校のフットボール・ゲームと云へば、その學校に關係ある老若男女擧つて見物又は應援に出て行くと云ふ習慣、従つて米國國民の殆んど全部がその關係ある學校のフットボール・ゲームを観ると云ふ國家的な習慣が出来て居り、それを以つて知らず識らずの裡に國民的融和を助成して居ります。即ち母校の試合の日には其れに關係ある種々の實業家、政治家、教育家其他色々の職業に従事する人々が期せずして一緒になり、商賣上の競争、政策上の反目、主義主張の相違を抛棄して、フエヤブレイと團結心の結晶とも云ふべきフットボール・ゲームに熱中する。此の一事を以てしても蹴球試合の國民的融和に對する貢獻が如何に大であるかが解ります。試合當日はその行はれる各スタジアムを中心として數十哩は愚か百哩、二百哩或はそれ以上の距離に亘り、大小の道路が殆んど試合の觀衆を乗せた自動車をも以て埋まるあの壯觀を見た丈けでも、必ずや共同目的への大熱心から何かと生れずには置かないと言ふ印象を受けざるを得ません。要するに斯くしてスポーツも亦 campus 同様、教

育の中に織込まれた一の國民精神の陶冶法であると言へる事と思ひます。

終に臨みて繰返して申して置きたいことは、既に科學文明の頂點に達した米國の思想界では、如何に物質文明が進歩しても、國家に指導精神の缺陷が生じては、全體としてのバランスを失つてゐるのに目覺めたと謂ふことでもあります。その結果として、今や全米國に互り教育事業の刷新が行はるゝに至り、この革新的教育事業が目標とするところの何物かは（生得知とも云ふべき）正に我等の畑の産物であります。要するに期せずして西洋は東洋に依つて、文化の進展を計らうとしてゐるのであつて、洵に面白い現象と謂はねばならぬ。今日各國共國家主義の旺盛なるときに、國際的には知らず識らずのうちに、文化の世界が接近しつゝあるのである。これは將來に對して果して何を物語るものでありませうか。

附 錄

本會設立月日

大正七年八月八日

本會寄附行爲

第一章 總 則

第一條 男爵牧野伸顯平山成信ハ赤星鐵馬ノ寄附ニ係ル金壹百萬圓ヲ以テ財團法人ヲ設立ス

第二條 本財團法人ハ啓明會ト稱ス

第三條 本會ハ公益ニ資スル爲メ左ノ事業ヲ行フヲ以テ目的トス

- 一 特殊ノ研究調査著作ヲ助成シ又發明發見ヲ獎勵スルコト
- 一 必要ニ依リ本會自カラ専門家ニ依囑シテ前項ノ事業ヲ爲スコト

委員ハ理事長之ヲ囑託ス

第四章 會 議

第十五條 會議ヲ分チテ理事會及評議員會トス

第十六條 理事會ハ理事長隨時之ヲ召集ス

第十七條 理事會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス

第十八條 評議員會ハ通常及臨時トス

通常評議員會ハ毎年十二月及三月ヲ以テ理事長之ヲ召集シ本會ノ豫算及決算ヲ議定ス

臨時評議員會ハ理事長必要ニ應シ之ヲ召集ス

評議員五名以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求スルトキハ臨時會ヲ召集スルコトヲ要ス

第十九條 左ノ事項ハ評議員會ノ議ニ付スルヲ要ス

一 寄附行爲ノ變更

一 本會諸規則ノ制定變更

一 本會ニ於テ施行スヘキ事業ノ決定

一 理事長理事及顧問ノ推薦

一 資産管理ノ方法

一 其他理事會ニ於テ評議員會ノ決議ヲ要スト認メタル事項

第二十條 評議員會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス但左ノ場合ニ於テハ評議員三分ノ二以上ノ出席アリ且出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

一 寄附行爲ノ變更

一 不動産ノ買入

一 理事長及理事ノ推薦

第五章 資 産

第二十一條 本會ノ資産ハ左ニ掲クルモノヲ以テ之ヲ組成ス

一 寄附財産金壹百萬圓

一 本會ノ事業又ハ財産ヨリ生スル收益
 一 其他本會ニ於テ取得スル財産
 第二十二條 本會ノ財産ハ國債證券又ハ確實ナル有價證券ヲ買入レ若クハ郵便官署
 又ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ルルモノトス但特別ノ事情アル場合ニハ評議員會ノ決
 議ヲ經テ不動産ヲ買入ルルコトヲ得

第六章 會計

第二十三條 本會ノ收支ハ每事業年度ノ末日ヲ以テ之ヲ決算ス
 第二十四條 本會ハ事業年度毎ニ財産目錄貸借對照表及事業報告書ヲ作り決算ト共
 ニ評議員會ニ提出スヘシ

本會職員名簿

顧問
 伯爵 牧野 仲顯
 理事長
 侯爵 大久保利武

常務理事
 鶴見 左吉雄

理事
 工學博士 子爵 大河内 正敏
 伯爵 樺山 愛輔
 串田 萬藏
 文學博士 三上 參次

評議員
 工學博士 伊東 忠太
 工學博士 子爵 大河内 正敏
 侯爵 大久保利武
 伯爵 樺山 愛輔
 工學博士 田中 芳雄
 鶴見 左吉雄
 工學博士 塚本 靖

- (二) 英國博物館所藏スタイン寫本寫真帳
- (三) 支那財政の真相と其革新策に就て
- (四) 支那の關稅改正問題 (缺本)
- (五) 假名の研究 (第二版)(貳拾錢)
- (六) 日本産業推移の經路
- (七) 米國少年裁判所の研究
- (八) 世界大戰の獨逸教育に及ぼしたる影響
- (九) 支那と日本とに於ける古代と近代 (缺本)
- (一〇) 佛、獨、白諸國農村の瞥見(第二版)(參拾錢)
- (一一) ハイゼンベルグ量子論諸問題(第三十三回講演速記) (缺本)
- (一二) デイラック量子論諸問題(第三十三回講演速記) (缺本)
- (一三) 農村問題と教育との一考察 (缺本)
- (一四) 英國救貧史研究 (貳拾五錢)
- (一五) 波斯關係圖書目錄 (缺本)
- (一六) 村塾教育の時代的使命 (缺本)
- (一七) 農村更生の礎としての農村女塾 (參拾錢)

一〇

文學博士 矢吹慶輝編
 經濟學博士 木村増太郎報告
 經濟學博士 木村増太郎報告
 文學博士 大矢透報告
 米 モーリス・ホーランド君報告摘要
 少年保護司 芳川顯雄報告
 獨逸 フリッツ・ケルレルマン述
 倫敦大學教授 アーノルド・ジェイトインビー述
 駒澤大學教授 笠森傳繁報告
 理學博士 仁科芳雄譯述
 武藏高等學校教頭 山本良吉述
 樞密顧問官 伯爵 金子堅太郎述
 早稻田大學講師 小島幸治報告
 文學士 田中於菟彌編述
 農學博士 小野武夫述
 駒澤大學教授 笠森傳繁述

三、講演集

- (一八) 水代謝の生理及び病理に關する實驗的研究 (拾錢)
- (一九) 米國「エール」大學の二大新施設 (貳拾錢)
- (二〇) 國史教育の改善 (缺本)
- (二一) 日本の現勢 (缺本)
- (二二) 現今に於ける米國の教育 (拾五錢)
- (一) 法律上より見たる國際聯盟 (缺本)
- (二) 獨逸の近況 (缺本)
- (三) 露國の最近社會變動の經過及因由 (缺本)
- (四) スタイン氏發見の燧燐畫に就きて (缺本)
- (五) 朝鮮李王家の古樂舞 (缺本)
- (六) 支那佛教史蹟踏査報告 (缺本)
- (七) 臺灣琉球の音樂に就きて (缺本)
- (八) 往來物(徳川時代庶民教育資料)に就きて (缺本)
- (九) 歐洲の近況 (缺本)
- (一〇) 建築の理想と實際 (缺本)
- (一一) 波斯、メソポタミヤ方面視察談 (缺本)
- (一二) ブラジル移民に就きて (缺本)

醫學博士 小杉虎一報告
 米國 (ヘルバート・フモルツカ) 述
 文學博士 中村孝也述
 青木利三郎編
 伯爵 樺山愛輔述
 法學博士 山川瑞夫
 日銀理事 深井英五
 文學博士 高楠順次郎
 東大助教授 今井時郎
 文學博士 瀧精一
 理學士 田邊尙雄
 文學博士 常盤大定
 理學士 田邊尙雄
 理學博士 岡村金太郎
 商工省書記官 石井銀彌
 工學博士 伊東忠太
 總領事 縫田榮四郎
 社會局書記官 富田愛次郎

(一三) 燉煌出土古寫本佛典に就きて (貳拾五錢)

琉球史概観

南島研究の現状

古琉球の歌謡に就きて

琉球美術工藝に就きて

琉球藝術の本質

琉球の音楽に就きて

(缺本)

(一四) 新土耳其國の建設

土耳其の經濟事情

(缺本)

(一五) 海外企業に就きて

眼前の異人種問題

アイヌ研究の現状

アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚

白老コタンアイヌの生活 (活動寫眞)

アイヌ生活の變遷

アイヌ語の本質

(缺本)

(一六) 我が國の古舞古樂に就きて (缺本)

(一七) 歐洲に於ける勞働問題の趨勢

前國際勞働理事會代表

一二

文學博士 矢吹慶輝

文學士 東恩納寬惇

東朝顧問 柳田國男

文學士 伊波普猷

工學博士 鎌倉芳太郎

伊東忠太

山内盛彬

内田定槌

前特命全權大使
土耳其代理大使
フルーシニョフアド・ペー

貴族院議員 藤山雷太

東朝顧問 柳田國男

東京帝大講師 金田一京助

理學博士 八田三郎

同 右 八田三郎

十勝アイヌ 伏根弘三

神學博士 チョン・パチラー

文學博士 高野辰之

前國際勞働理事會代表 前田多門

(一八) 支那と外國

支那の帝政と共和政

(缺本)

(一九) 獨逸の近況 (缺本)

(二〇) 支那最近の政情 (缺本)

(二一) 國際經濟會議に就きて (缺本)

(二二) 滿蒙に於ける人類學上の研究に就きて (缺本)

(二三) 日本の立場より見たる西洋美術 (缺本)

(二四) 南洋に於ける日本關係史料遺跡に就きて (缺本)

(二五) 東洋藝術の系統

琉球染色に就きて

(缺本)

(二六) 朝鮮陶器に就きて

燉煌出土品に就きて

(缺本)

(二七) 西洋美術に於ける東洋的要素

ベルシャ旅行談

(缺本)

(二八) 歐米視察談

(二九) 希臘事情

(三〇) 滿蒙の經濟的價值

(三一) 軍縮會議の開かるゝに臨みて

文學博士 坪井九馬三

文學博士 矢野仁一

老川茂信

元湖廣新報社長 笹川潔

前國際經濟會議代表 志立鐵次郎

文學博士 鳥居龍藏

東京美術學校教授 矢代幸雄

文學博士 黒板勝美

工學博士 伊東忠太

鎌倉芳太郎

倉橋藤治郎

文學博士 矢吹慶輝

東京美術學校教授 矢代幸雄

文學博士 黒板勝美

貴族院議員 男爵 藤村義朗

特命全權公使 川島信太郎

經濟學博士 木村増太郎

海軍少將 南郷次郎

一三

- (三) 産業の合理化 (缺本)
- (四) 最近の獨逸 (缺本)
- (五) 歐洲労働運動の趨勢と失業問題
航空研究の最近の情況 (缺本)
- (三六) ペルシヤを中心としたる西方亞細亞の美術 (廿五錢)
- (三七) 歐米諸國補習教育の近況と我國教育制度の改善 (缺本)
- (三八) 支那建築と其の裝飾 (貳拾五錢)
支那陶器の鑑賞 (貳拾五錢)
- (三九) 支那漆藝の發達とその趣味 (四拾錢)
支那金工に就きて (四拾錢)
支那文様の特質 (四拾錢)
- (四〇) 支那國民性とその染織 (參拾錢)
支那の瓦磚 (參拾錢)
支那工藝に關する文獻 (參拾錢)
- (四一) 東洋文化の世界的意義 (第二版) (貳拾五錢)
- (四二) 國民思想に關する一觀察 (缺本)

一四

商工省工務局長 吉野信次
 駐獨特命全權大使 長岡春一
 法學博士 富田愛次郎
 前國際労働會議政府代表 斯波忠三郎
 航空研究所長男爵 青山新
 東京美校助教授 田尻常雄
 美術研究所々員 伊東忠太
 橫濱高商校長 奧田誠一
 工學博士 伊東忠太
 國寶保存會委員 奧田誠一
 東京美術學校教授 六角紫水
 帝國美術院會員 香取秀眞
 東京高等工藝學校校長 安田祿造
 東京高等工藝學校教授 鹿島英二
 工學博士 關野貞
 東京美校助教授 田邊孝次
 金雞學院學監 安岡正篤
 文學博士 三上參次

- (四三) 金本位的作用、殊に金融との關係 (貳拾五錢)
- (四四) 民法改正と婚姻問題 (貳拾五錢)
- (四五) 儒教の泰西思想に及ぼせる影響 (貳拾五錢)
- (四六) 古典の趣味 (缺本)
- (四七) 滿洲支那領土說の批判と滿洲國の建國 (貳拾五錢)
- (四八) 滿洲の文化と遺跡の史的考察 (缺本)
- (四九) 日本精神の内容 (缺本)
- (五〇) 儒教思想と政治問題とに關する史的考察 (貳拾錢)
- (五一) 世界に於ける日本美術の位置 (第二版) (五拾錢)
- (五二) 朝鮮工藝の東洋文化に於ける地位 (貳拾五錢)
朝鮮古陶器の研究に就きて (貳拾五錢)
- (五三) 日本建築の變遷 (缺本)
- (五四) 日本精神の眞義と歸趨 (貳拾五錢)
- (五五) 文化の原動力とその轉機の問題 (貳拾五錢)
- (五六) 氣象の研究と其の應用 (缺本)
- (五七) 丙午迷信の科學的考察 (參拾錢)

法學博士 山崎覺次郎
 法學博士 男爵 穂積重遠
 政治學博士 五來欣造
 宮中顧問官 井上通泰
 京都帝國大學名譽教授文學博士 矢野仁一
 工學博士 伊東忠太
 文學博士 高楠順次郎
 文學博士 市村瓊次郎
 東京美術學校教授 矢代幸雄
 朝鮮陶器研究會理事 倉橋藤治郎
 朝鮮陶器研究會幹事 淺川伯教
 工學博士 伊東忠太
 金雞學院學監 安岡正篤
 文學博士 姉崎正治
 理學博士 藤原咲平
 東亞考古學會幹事 小林胖生

- (五) 建築に現れたる日本精神 (貳拾錢) 工學博士 伊東忠太
- (五) 社會事業と佛教 (貳拾五錢) 文學博士 辻善之助
- (六〇) 印度文化の大觀 (貳拾錢) 慶應大學教授 野口米次郎
- (六一) 文化史上より觀たる古代ギリシヤ人と日本人 (貳拾五錢) 文學博士 村川堅固
- (六三) 熱河遺蹟の建築史的價值 (參拾錢) 工學博士 伊東忠太

補助成績出版物

- (一) 本朝文粹註釋 上下 京都 内外出版會社 柿村重松
- (二) 爪哇史 三四五十錢 岩波書店 松岡靜雄
- (三) 古語拾遺 (英文) 二圓 明治聖德記念學會 加藤星野 玄智 日四郎
- (四) 校本萬葉集 萬葉集刊行會 文學博士 佐々木信綱
- (五) 更科日記錯簡考 三圓 目黒書店 東京高等師範學校教授 玉井幸助
- (六) 日華大辭典 (縮刷) 十圓 京都 内外出版會社 服部操
- (七) 西日辭典 四圓 右文社出版部 日墨協同會社
- (八) アイヌ語辭典 十二圓 教文館 神學博士 ジョン・パチラー

- (九) 支那財政論 六圓五十錢 大阪屋號書店 經濟學博士 木村増太郎
- (一〇) 大唐西域記東南印度諸國ノ研究 六圓 森江書店 文學士 高桑駒吉
- (一一) 經濟上ヨリ蘭領東印度見タル 五圓五十錢 財政經濟學會 増井貞吉
- (一二) 德川制度史料 十圓 六合館 小野清
- (一三) 蠨螋と山椒魚 十圓 丸善書店 田子勝彌
- (一四) アイヌユーカラの研究 一、二共二十五圓 東洋文庫 東京帝大助教授 金田一京助
- (一五) 畫の教育學 三圓八十錢 刀江書院 畫家 上阪雅之助
- (一六) 百世の師・孔子 一圓二十錢 玄黃社 貴族院議員 赤池濃
- (一七) 續日本四書註釋全書 論語解、學庸篇 讀五叢鈔 東洋圖書刊行會 東京大學講師 關儀一郎
- (一八) サンドロ・ボテッツイチエリー 約二十五圓 マイシイ・サイエター 東京美術學校教授 矢代幸雄
- (一九) 日本その日々 上・下共三圓 科學智識普及會 石川欣一
- (二〇) 校訂・延喜式 上・下各九圓 大岡書店 皇典講究所
- (二一) 後法興院記 上・下各四圓 至文堂 文學博士 平泉澄
- (二二) 梵文金光明最勝王經 十圓 京都 東方佛教協會 泉芳環
- (二三) 朝鮮禪教史 五圓 春秋社 文學博士 忽滑谷快天

(三) 亞富汗斯坦

三圓八十錢

東亞同文會

一八

田鍋安之助

明) 化學工業篇、造船篇、鐵道

(三) 治工

一百四十五圓

日本工學會

編纂委員長

田邊朝郎

業篇、火兵、鐵鋼篇、鑛業篇、
史機械、地學篇、提要索引、

(三六) 政教より

三圓

早稻田大學出版部

貴族院議員

赤池濃

(三七) 日本產蛙 總說

十八圓

岩波書店

理學博士

岡田彌一郎

(三八) 播磨風土記新考

七圓五十錢

大岡山書店

宮中顧問官

井上通泰

(三九) 鳥類生態寫真

上三圓五十錢
下四圓

三省堂

農學博士

內田清之助

(三〇) ヒボクラテス全集

十八圓

岩波書店

醫學博士

今裕

(三一) 内外蒙古の横顔

二圓八十錢

海外社

畫家

玉井太市

(三二) 繪畫の製作と鑑賞

本文繪畫共二十五圓

日本評論社

東京美術學校教授

和田英人

(三三) 鳴沙 餘韻

解說共六十圓

岩波書店

文學博士

矢吹慶輝

(三四) 佛教大辭典

全五卷各十八圓

佛教大辭典發行所

文學博士

望月信亨

(三五) 近世地方經濟史料

全十卷各六十圓

龍吟社

農學博士

小野武夫

(三六) 明治前期財政經濟史料集成

全十二卷七十六圓

改造社

東大教授

大橋武雄

(三七) 大乘院寺社雜事記

全十二卷五十四圓

潮書房

文學博士

辻善之助

(三八) 支那工藝圖鑑

十圖 十冊
五解 冊說

一百五十圓

帝國工藝會

帝國工藝會

(三九) 實驗葡萄全書

上中各五圓五十錢
下三圓五十錢

西ヶ原刊行會

川上善兵衛

(四〇) 日本藥用植物圖譜

十圓

日本藥報社

理學士

市村塘

(四一) リットン報告書全文解剖

八十錢

海外社

神田正雄

(四二) 鎌倉室町時代之儒教

十圓

日本古刊行會

足利衍述

(四三) 地震に伴ふ現象の研究及資料

四圓八十錢

岩波書店

武者金吉

(四四) 莊園資料

上下各十四圓

帝都出版社

清水正健

(四五) 鳥類寫生圖譜第四集

五十枚 三十三圓

鳥類寫生圖譜發行會

東京美術學校教授

小泉勝爾

(四六) 日本解剖學計數

六圓

丸善書店

醫學博士

林香苗

(四七) エチオピア帝國

三圓五十錢

斯文書院

田鍋安之助

(四八) 日本山林史

上下共二十圓

日本刊行會

農學博士

遠藤安太郎

(四九) 姓氏家系大辭典	第二卷各十	二	圓	姓氏家系刊行會	太田亮
(五〇) 滿洲に於ける露國の利權外交史	五	四	五	圓	山下義雄
(五一) 室町時代庭園史	八	圓	圓	岩波書店	外山英策
(五二) 肥前風土記新考	二	圓	圓	巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五三) 豊後風土記新考	二	圓	圓	巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五四) 西海道風土記逸文新考	三	圓	圓	巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五五) 日本ノ繪卷物 (英文)	五	弗	シカゴ大學	畫家 戸田謙二	
(五六) 史料大成 (全三十册) 一册三圓二十錢	內	外	書籍會社	文學博士 笹川種郎	
(五七) 中邊分別論釋疏 (梵本)	六	圓	三十錢	破塵閣書房	文學士 山口益
(五八) 同 (譯註)	五	圓	二十錢	同	文學士 山口益
(五九) (英譯) 古今名歌集	上	下	共十圓	丸善書店	文學士 宮森麻太郎
(六〇) 救濟制度要義 (再版)	三	圓	五十錢	昭森社	法學士 井上友一
(六一) 四川省綜覽	六	圓	圓	海外社	神田正雄

昭和十二年一月六日印刷
昭和十二年一月十日發行

(定價金拾五錢)

發行兼編輯者 笠 森 傳 繁
 印刷者 松 井 方 利
 印刷所 東京印刷株式會社
東京市深川區白河町四丁目一番地一
 東京市深川區白河町四丁目一番地一

發行所 (電話丸ノ内 六八〇番)
 財團 啓明會事務所
東京市麹町區丸ノ内一丁目六番地壹
 東京海上ビルディング五階五四六號

發賣所 (電話自(56)七(四一) 京橋至(七)四八)
 北 隆 館
東京市 京橋區 槇町三ノ三

(四九) 姓氏家系大辭典	第二卷各十	二	圓	姓氏家系刊行會	太田亮
(五〇) 滿洲に於ける露國の利權外交史	五	圓五十錢		鳴右堂書房	山下義雄
(五一) 室町時代庭園史	八	圓		岩波書店	農學士 外山英策
(五二) 肥前風土記新考	二	圓		巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五三) 豊後風土記新考	二	圓		巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五四) 西海道風土記逸文新考	三	圓		巧人社	宮中顧問官 井上通泰
(五五) 日本ノ繪卷物 (英文)	五	圓		シカゴ大學	畫家 戶田謙二
(五六) 史料大成 (全三十冊) 一冊	三	圓二十錢		内外書籍會社	文學博士 笹川種郎
(五七) 中邊分別論釋疏 (姓本)	六	圓三十錢		破塵閣書房	文學士 山口益
(五八) 同	五	圓三十錢		同	文學士 山口益
(五九) (英譯) 古今名歌集	上・下共十	圓		丸善書店	文學士 宮森麻太郎
(六〇) 救濟制度要義 (再版)	三	圓五十錢		昭森社	法學士 井上友一
(六一) 四川省綜覽	六	圓		海外社	神田正雄

昭和十二年一月六日印刷
昭和十二年一月十日發行

(定價金拾五錢)

發行兼編輯者 笠 森 傳 繁
 印刷者 松 井 方 利
 印刷所 東京印刷株式會社
東京市深川區白河町四丁目一番地一

發行所 (電話丸ノ内 六八〇番) 財團 啓明會事務所
東京市麹町區丸ノ内一丁目六番地壹
 東京海上ビルディング五階五四六號

發賣所 (電話自 七四一 至 七四八) 北 隆 館
東京市 京橋區 根町三ノ三

14.5
145

終